セラミック九州

CERAMIC KYUSHU

佐賀県立九州陶磁文化館報

The Kyushu Ceramic Museum News Letter

No.56

編集・発行　佐賀県立九州陶磁文化館

発行年月日　2020. 3. 23

〒844-8585 佐賀県西松浦郡有田町戸杓乙3100-1

TEL.0955-43-3681 FAX.0955-43-3324

https://saga-museum.jp/ceramic/

E-mail: kyuto@pref.saga.lg.jp

〈色絵亀甲割鳳凰文大花瓶〉（いろえきっこうわりほうおうもんだいかびん）

肥前・有田　南里嘉十（なんりかじゅう）

1870 ～ 1880年代

佐賀県立九州陶磁文化館所蔵

南里裕美子氏寄贈

明治時代に欧米向けに作られた一対の大花瓶です。

底部に嘉と壽の文字を合わせたようなマークと「南里製」と書かれていることから、幕末から明治にかけての窯焼きである南里嘉十の製品であることが分かります。

輪花状の口縁が上に開く形態の花瓶で、器面は亀甲形の窓を繋いで4方向に区画され、胴部の一番大きな窓には、鳳凰が対となるデザインで描かれています。赤や金といった色絵による彩色が目立ちますが、染付の青とともに緑や鶯（うぐいす）色の釉下彩が使用されています。

～令和2年度 特別企画展のお知らせ～

開館40周年記念・寄贈記念 特別企画展

髙取家コレクション

40th Anniversary/Special Commemorative Exhibition : The Takatori Collection

○開催趣旨

唐津の炭鉱王、髙取伊好氏と志那夫人、嗣子の九郎氏は、炭鉱経営で成した財を投じ地域の発展に尽力しました。その社会貢献は、文化・観光振興、唐津焼の再興支援まで多岐にわたります。伊好氏は唐津城本丸の西南の地に日本有数の近代和風建築である邸宅（重要文化財 旧高取家住宅）を建てると、お膝元である肥前を中心とした国内外の上質なやきものを集めて、全国からの賓客を茶会や宴席でもてなし多士済々の交流の場としました。

展覧会では、このたび当館へ寄贈された約600件と、平成19年に御寄贈頂いた約540件におよぶ旧髙取邸の陶磁器約1140件の中から、古唐津茶碗「玄海」（佐賀県重要文化財）をはじめとする茶陶や古伊万里、鍋島など多彩な作品180件を紹介します。

○主　　催 佐賀県立九州陶磁文化館
○会　　場 佐賀県立九州陶磁文化館
　　第1・2・3展示室
○会　　期 令和2年(2020年)5月23日(土) ～
　　7月12日(日)
○休 館 日 月曜休館
○観 覧 料 無料

青磁紗綾形桃文台付皿
肥前　有田窯　1660 ～ 1680年代

色絵唐花文猪口・色絵鸚鵡文猪口・染付雲文猪口
肥前　鍋島藩窯　1650 ～ 1660年代

灰釉彫文茶碗　銘 玄海
肥前　1580 ～ 1600年代
佐賀県重要文化財

染付束蓮文大皿
中国　15世紀第1四半期ｃ

～令和2年度 特別企画展のお知らせ～

開館40周年記念・寄贈記念 特別企画展

柴澤コレクション

40th Anniversary/Special Commemorative Exhibition : The Shibasawa Collection

○開催趣旨

佐賀県立九州陶磁文化館は、昭和55年（1980年）11月1日に開館し、令和２年（2020年）には40周年を迎えます。開館以来、肥前地域を中心とする九州の古陶磁について調査研究を進め、国内外で評価されてきました。こうした実績が所蔵者や蒐集家の信頼につながり、柴田夫妻コレクションをはじめ多くの古陶磁を寄贈いただく契機にもなりました。こうして寄贈された作品は九州陶磁文化館の調査研究や展示に活用されています。

この展覧会は、新潟や山形を中心とする東北日本海沿岸地域に伝わった江戸時代の肥前磁器（古伊万里）を長年探求・蒐集した故 柴澤一仁氏のコレクションが寄贈されたことを記念して開催するもので、江戸時代に北前船の交易によって広く流通した多様な肥前磁器の数々を紹介します。

○主　　催 佐賀県立九州陶磁文化館
○会　　場 佐賀県立九州陶磁文化館
　　第1・2・3展示室
○会　　期 令和2年(2020年)10月16日(金)～
　　12月13日(日)
○休 館 日 月曜休館（11月23日の勤労感謝の日は開館し、11月24日に休館）
○観 覧 料 無料
○出品件数 432件（予定）

染付唐花文皿
肥前　鍋島藩窯　1670～1690年代

色絵椿蓮文大皿
肥前　有田　1650年代

青磁梅文盃台
肥前　波佐見　1630～1640年代

新収蔵品展

Exhibition of New Acquisitions

○会　　期 令和2年(2020年)9月5日(土)～
　　10月4日(日)

令和元年度、新たに収蔵品となった初期伊万里様式や幕末～明治の輸出磁器、現代作品などをお披露目します。

染付吉祥字斜格子文碗
肥前 有田 1610～1630年代
廣井孝夫氏 寄贈

染付唐草文皿
肥前 亀山 文政四年(1821年)
寄贈品

～令和元年度 特別企画展の報告～

特別企画

［有田×野老］展

ARITA×TOKOLO EXHIBITION

○主　　催［ 有田×野老 ］展実行委員会
（佐賀県立九州陶磁文化館・西日本新聞社）
○協　　力 サガテレビ
○後　　援 朝日新聞社、一般社団法人共同通信社佐賀支局、佐賀新聞社、㈱時事通信社佐賀支局、毎日新聞社、読売新聞西部本社、NHK佐賀放送局、NBCラジオ佐賀、エフエム佐賀、FBS福岡放送、九州朝日放送、RKB毎日放送、テレビ西日本、TVQ九州放送
○制作協力 李荘窯業所、株式会社香蘭社、㈱ぐるなび総研、佐賀県窯業技術センター
○特別出品 BUAISOU、noiz、松川昌平、平本知樹、株式会社香蘭社
○会　　場 佐賀県立九州陶磁文化館
第１・第２展示室
○会　　期 令和元年9月20日（金）～
11月24日（日）　57日間
○館 覧 料 大人600円（500円）　大学生300円（200円）高校生以下無料※（　）内は20名以上の団体料金もしくは前売り料金

○内　　容

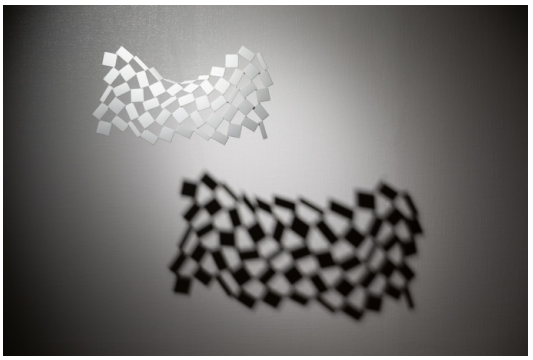
野老朝雄（ところあさお）氏は、東京 2020 オリンピック・パラリンピックのエンブレムに「組市松紋（くみいちまつもん）」が採用されるなど、「つなげる」をテーマに紋様の制作をてがけ、美術、建築、デザインの境界領域で活動を続ける美術家。野老氏をゲストアーティストとして企画・開催された展覧会であり、野老氏が魅了される「青」の色彩を主題に、九州陶磁文化館のこれまでの研究活動も掛け合わせた展覧会となりました。また、日本を代表する展示プロデューサーの洪恒夫氏（東京大学総合研究博物館特任教授）によって、伝統と革新の融合による有田焼の可能性を模索した展示が試みられました。

◎関連イベント　期間中、下記の催しが開催されました。

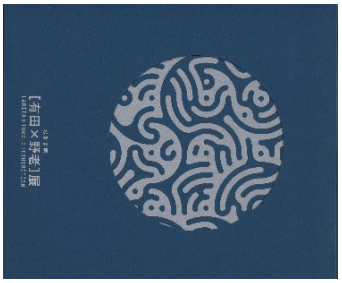
○トークショー「野老朝雄氏の青と紋様の世界」
9月21日（土）　出演：野老朝雄氏
洪恒夫氏（東京大学総合研究博物館特任教授）
寺内信二氏（李荘窯業所代表取締役社長）
鈴田由紀夫（佐賀県立九州陶磁文化館館長）

○ギャラリートーク
10月19日（土）　出演：野老朝雄氏

五千五十水玉紋様皿　野老朝雄　2019年



ARITAYAKI RHOMBUS WORKS UNIT　野老朝雄　2019年



展覧会図録　デザイン：小木央理（TOKOLOCOM）

第116回有田国際陶磁展

ARITA INTERNATIONAL CERAMICS COMPETITION

○会　　期　令和元年(2019年)4月29日(月・祝)～
5月12日(日)　14日間

明治29年に発足し、名称を変えながらも116回目を迎えた本展覧会では、今回も国内外から多くの作品が応募されました。九州陶磁文化館では、第1席の文部科学大臣賞を受賞した嶋田敏生氏の「連作　バベルの塔」を始め、美術工芸品・オブジェ部門の入賞・入選作品83点と、産業陶磁器部門から上位3作品を展示しました。

嶋田敏生「連作　バベルの塔」文部科学大臣賞

新収蔵品展1　寄贈記念

今泉吉郎・吉博コレクション

Commemorative Exhibition of New Acquisitions 1
"The Imaizumi Kichiro and Yoshihiro Collection"

○会　　期　令和元年(2019年)10月5日(金)～
11月24日(日)　44日間

肥前磁器研究家として広く知られた故今泉吉郎(いまいずみきちろう)氏と御子息の吉博(よしひろ)氏により、二代にわたり集められた貴重なコレクション100点を九州陶磁文化館にご寄贈いただいたことを記念した展覧会です。

吉郎氏が好んで集められていたという1660年代を中心とした寛文様式の染付作品を中心に、鍋島焼や波佐見焼の青磁作品、幻の色絵といわれる吉田焼の初期色絵作品などを展示しました。

肥前陶磁の中で文様にされることが稀な鵲(かささぎ)(カチガラス)を描いた作品や、「肥前/年木山」の銘がある作品など、珍しい作品が多く、今後の肥前磁器研究に資するコレクションです。

吉郎氏の著書に使用された作品も含まれており、今泉元佑(げんゆう)名義の著書も一緒に紹介しました。

開会式ギャラリートーク

展示風景

新収蔵品展2

Exhibition of New Acquisitions 2

○会　　期　令和元年(2019年)12月14日(土)～令和2年(2020年)1月13日(月・祝)
25日間

平成29・30年度に寄贈受入や購入を行い、新たに収蔵した陶磁器作品の中から、49件58点を展示しました。江戸時代から明治期にかけての有田焼や鍋島焼、志田焼、白石(しらいし)焼といった佐賀の陶磁器に加え、長与焼や亀山焼、現川焼といった長崎の陶磁器も注目される展覧会となりました。

展示風景

調査ノート

資料紹介＜箙（えびら）形掛花入（かけはないれ）＞

平成28年（2016年）度から令和元年（2019年）度にかけて佐賀県文化課の事業として、伝統的有田焼再認識プロモーション事業が4か年実施された。この事業は、海外の学芸員との交流を通じ、情報交換を行うとともに、当館から学芸員を派遣して、海外の博物館等に所蔵されている肥前陶磁を調査するという事業もあわせて行われた。そのうち平成31年（2019年）1月21日から23日にかけてアメリカのロサンゼルスカウンティ美術館にて行われた資料調査の中で確認した、特筆すべき資料を今回類例等とともに紹介したい。

図1　青磁箙形掛花入　大川内　鍋島藩窯1690～1730年代
長径36.51 cm, 幅16.51 cm, 高さ6.99 cm
ロサンゼルスカウンティ美術館　収集委員会寄贈
収蔵番号AC1995.55.1　アメリカ　ロサンゼルス
Hanging Flower Vase in the Form of a Quiver, Nabeshima ware; Gift of the 1995 Collectors Committee, inv. No. AC1995.55.1, AHM, STG, 116 picture no. ma-75689_2901

ロサンゼルスカウンティ美術館は、西海岸最大の総合美術館で、欧州の古代から現代芸術、アジア、アフリカ、アメリカ大陸まであらゆる人類の芸術作品を網羅する大規模な美術館である。博物館の頭文字をとって「LACMA（ラックマ）」の愛称で親しまれている。収蔵品は約13万5千点、年間来館者数は100万人にも及ぶ。複数の建物からなる壮大な美術館で、現在、1988年に建設された日本館は再編により閉室しているが、美術館全体は再編と増改築されて2024年にリニューアルオープンする。ここに展示される日本美術のコレクションもピーター・ズントーのデザインによる新館に常設展示される予定。日本美術の収蔵品はおよそ 7千点という膨大なコレクション数を誇る中、鍋島、有田、唐津等の優品を収蔵しており、きわめて多くの作品をウェブ公開している。

https://collections.lacma.org/

図１、図２は、ロサンゼルスカウンティ美術館が所蔵する鍋島の青磁箙形掛花入である。無傷で非常に状態もよく、修復痕もない完璧な状態である。類品に、今右衛門古陶磁美術館所蔵品（図３）もあるが、環の向きや背板の形状など細部は異なっている。箙（えびら）というのは、矢を入れる用具であるが、貴人を守る随身の持物であり、所持する人物の地位の高さを連想させる。佐賀藩が花入を献上・贈答するような高位の公家や武家の御道具らしい作例といえるであろう。

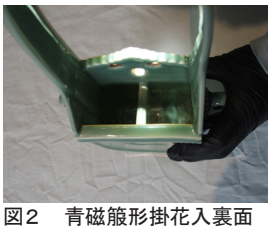


図２　青磁箙形掛花入裏面および内部　ロサンゼルスカウンティ美術館品

背板の上部には稜線を装飾する浅い線彫りがあり、両サイドにつけられている輪の向きが異なる。

図３　青磁箙形掛花入
大川内　鍋島藩窯1690～1730年代
長径36.51 cm, 幅16.51 cm, 高さ6.99 cm
今右衛門古陶磁美術館所蔵

このような箙形掛花入の陶片が、藩窯のあった大川内山の旧代官詰所周辺から出土している（図４）（注１）。昭和51年、52年度の調査で出土したもので、第I地点第1および第2トレンチからの出土品である。第1トレンチ4層および第2トレンチ2層で出土した陶片が接合している。この陶片は、幅が約12㎝であり、ロサンゼルスカウンティ美術館所蔵品より細身の製品である。背板に楕円形の釘穴が設けられ、その両脇に左右対称に如意形の穴があけられており、柱状の部位が中央に設けられている点など、伝世品と共通した作りとなっている。側面に青磁釉が厚くかかる部分がかすかに残っており、この部分には環が設けられていたものと推測される。

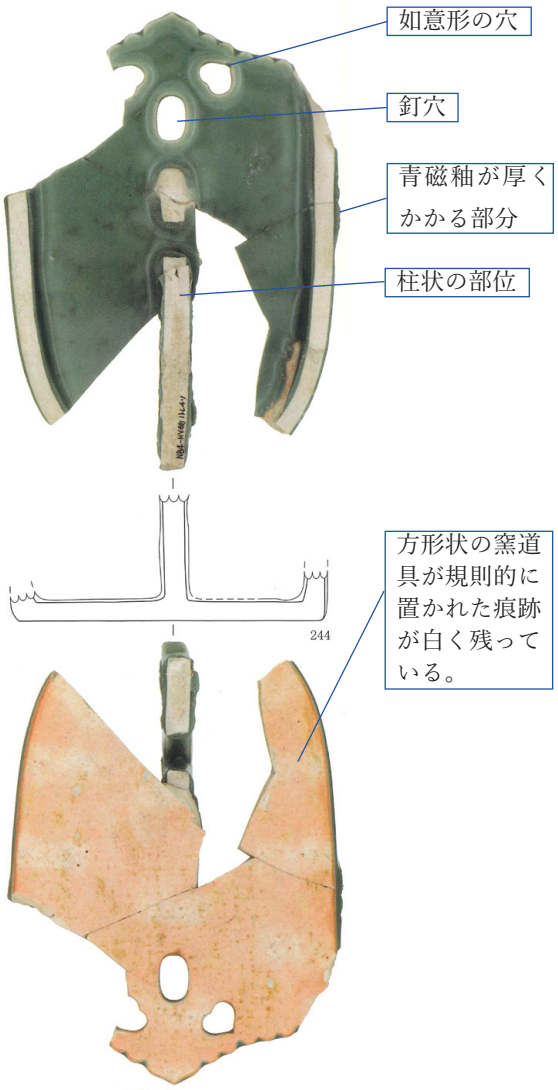


図4　箙形掛花入陶片表裏　伊万里市所蔵
『鍋島藩窯－出土陶磁にみる技と美の変遷－』編集発行：鍋島藩窯研究会2002年10月31日　98頁より転載

同じ出土地点からは盛期を主体とする多くの藩窯製品が出土しているとされ、青磁の置物と推測されるものや、硯屏などが出土しており、型と板づくりを組み合わせた青磁製品が含まれている。これらの製品は、代官所に隣接する細工場で成形され、登り窯で焼成されたあと、ふたたび代官所まで運ばれ廃棄されたのであろう。検品されたのちに、佐賀藩の御用品としてしかるべき献上・贈答先へともたらされ、現在は１点が有田の今右衛門古陶磁美術館の所蔵品となり、同様の作例１点がアメリカに渡り、ロサンゼルスカウンティ美術館に収蔵されることとなった。いずれの作例も来歴は明らかではなく、佐賀藩が献上または贈答したであろう旧蔵者については現在不明である。

図５　色絵松梅牡丹文箙花入　滴翠美術館所蔵　京焼
高さ 33.1㎝　幅 13.0

図５は、古清水の箙形掛花入である。雅やかな作例で、形状は鍋島青磁の作例に近似している。矢を納める穴は5つ設けられており、箙としての痕跡をよりとどめているのかもしれない。これらの箙形掛花入を所持していた人物は明らかではない。しかしながら、青磁花入については、古文書の解析によって、佐賀藩による献上もしくは贈答先などが判明することを期待したい。

ロサンゼルスカウンティ美術館での調査および写真掲載については、ホリス・グダル日本美術部次長の格別なご配慮とご教示をいただいた。心よりお礼申し上げたい。また、写真掲載にあたり、滴翠美術館、伊万里市教育委員会、今右衛門古陶磁資料館のご協力をいただいた。資料の評価について、元名護屋城博物館長の東中川忠美氏、大橋康二当館名誉顧問のご助言をいただいた。記してお礼申し上げたい。（藤原友子）

注1：『鍋島藩窯－出土陶磁にみる技と美の変遷－』鍋島藩窯研究会編集発行2002年10月31日　22頁および188頁
参考文献：佐藤雅彦編『日本陶磁全集28乾山　古清水』中央公論社発行1975年

シリーズ やきものの技法（47）

伏せ焼（ふせやき）

伏せ焼とは製品の天地を逆にして窯に詰める焼成法のことである。伏せ積みや中国では覆焼（ふくしょう）とも言われる。畳付部分も含め、外面全てを施釉することができ、口縁部分を固定することによって歪みを抑えることもできる。

中国では宋時代の白磁にみられるなど、古くから使用され、特に中国河北省の定窯の製品に多い。

碗や皿などを伏せ焼する場合は、釉による熔着を防ぐために口縁部分の釉を剥ぎ、伏せた状態で窯詰めする。釉剥ぎした口縁部は、焼成後のざらつきをなくすために研磨したり、覆輪（ふくりん）などを施した事例もある。

香炉などは内面の無釉部分を利用して、小瓶のような専用の窯道具に被せて焼く。伏せ焼で焼成された香炉の製品として、写真で紹介している伝世品や、有田の長吉谷窯跡や谷窯跡などに出土例があり、長吉谷窯跡からは焼成に使用されたと考えられる窯道具も出土している。他にも口縁部の釉等を剥ぎとった皿や猪口など、肥前磁器の伏せ焼は主に 17 世紀にみられる。

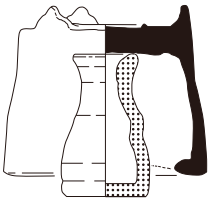
明治の有田などでは、把手が付くコーヒー碗などを焼成する際に伏せ焼で焼成する。この場合は、そのままの状態で焼成すると把手の重みで口がゆがんでしまうので、それを防ぐためである。

（宮木貴史）

左：内面は無釉になっている。

上：高台や足の畳付部分にも釉がかけられている。

白磁香炉
1650 ～ 1680 年代
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵
柴田夫妻コレクション



伏せ焼による香炉の焼成法
『古伊万里の見方 シリーズ 4 窯詰め』
佐賀県立九州陶磁文化館 2007 より

シリーズ やきものにみる文様（47）

獅子牡丹文（ししぼたんもん）

百獣の王とされる獅子と、花の王とされる牡丹を組合せた文様で、古くから様々な工芸品に表されている。勇壮な獅子と艶麗な牡丹の組合せは、豪華な文様となる。

牡丹は中国原産の落葉低木で、中国では富貴の花として古くから愛されている。日本でも平安時代には渡来していたとされ、江戸時代には一般に栽培されるようになった。獅子の意匠も中国から伝来しており「唐獅子」とも呼ばれる。その勇猛な姿から武家に好まれ、鍔や襖絵、屏風絵などに描かれている。

両者を合わせた意匠は、鎌倉時代の作である建長寺（鎌倉市）の黒漆須弥壇（重要文化財）に見られるなど、工芸品や建築装飾に表されている。また謡曲『石橋』では牡丹の花の前で文殊菩薩の使いである獅子が華麗な舞を披露し、獅子に牡丹の慣用句は取合せの良いことを示すなど、この二者の組合せは日本文化の中に根付いている。

肥前磁器では、17 世紀後半から 18 世紀にかけて描かれることが多い。中国磁器にも獅子牡丹を表したものがあるが、とりわけ有田では日本的な意匠が増え文様が多様化していく 17 世紀後半以降に盛んになった。

写真の染付獅子牡丹文輪花皿は、まさに 17 世紀後半のもので、見込には染付で大輪の牡丹の花と、躍動感のある獅子を描く。このように獅子と牡丹を対比するように描く他、獅子の周りを囲うように牡丹を配したものや、獅子と牡丹を交互に配したものなど、バリエーションも多い。

（宮木貴史）

染付獅子牡丹文輪花皿　1660 ～ 1680 年代
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵
柴田夫妻コレクション